

児島ジーンズの成功要因に関する一考察

1180460 中西 諒

高知工科大学マネジメント学部

1.概要

現在、日本の人口割合は、都心付近では増加傾向、対して、地方では減少傾向が見られる。地方の人口減少は深刻である。地方の人口減少を抑えるためには、地方企業が生き残り、地域を活性化させる必要がある。しかしながら、地方の企業は、価格競争の激化した現代では、生き残りが難しく、地域活性化へ繋げることもできていないのが現状である。

今回取り上げる、児島地域はジーンズによって地域活性化が成功しているといえる。本研究では、児島ジーンズの成功要因を明らかにすることで、地域のブランドを立ち上げた際の地域活性化の鍵を模索していく。

2.背景

本テーマを選定した理由として2点あげられる。

1点目は、単純にジーンズについて知りたいと考えたからである。私は衣類を装うことが好きで、普段からファッションのトレンドを意識的に調査して、自分のコーディネートの中に落とし込む努力をしている。普段からのトレンド調査の中で、ジーンズは流行り廃りのないアイテムで、誰もが一本は持っていると言われるくらい世の中に当たり前のように普及していると知った。今後も廃れることがないと、考えられるジーンズ業界を、もっと知りたいと考えたことがあげられる。

2点目は、昔から親しみのあった児島ジーンズが世界的に有名である理由を知りたかったからである。岡山県の児島地域は現在、私の祖母が居住している場所であり、幼少期から馴染みのある場所であった。駅周辺に干されてあるジーンズも、見慣れていたので何も思うことなく高校まで過ごしてきたが、大学で高知県にきて、児島

のジーンズは世界的に見て有名であると初めて知り、研究しようと考えた。

ジーンズ業界の現状

ジーンズの歴史は長く、1850年頃にアメリカで起こったゴールドラッシュの際に、作業着として労働者の中で流行ったことから始まった。これまでの作業着は、立ったりしゃがんだりを繰り返していくと、すぐにボロボロになってしまっていた。そこでリーヴァイ・ストラウスは、頑丈な作業服に需要があると考え、作り出したのがリーバイス 501である。1900年代に入ると、それまで作業着として扱われてきたジーンズがファッションの一部として定着してきた。この背景にはその当時流行していたカウボーイ映画の影響が考えられる。

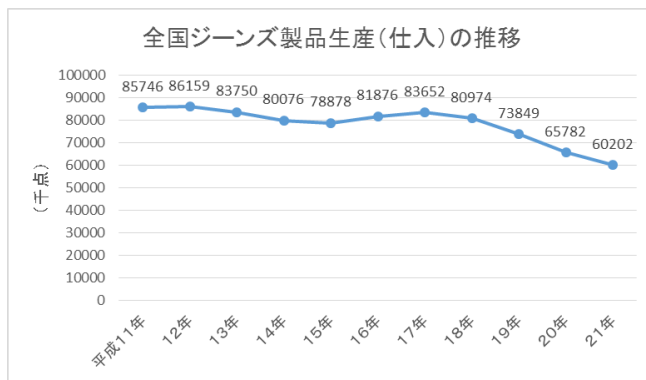


図1 全国ジーンズ製品生産(仕入れ)の推移(出典:「岡山県の繊維産業」より)

日本では、1923年に起きた関東大震災の際に支援物資の中にジーンズが入っていたことが始まりと言われていて、当時は「香港ズ

ボン」と呼ばれていた。1945年頃、終戦後の日本は、ジーンズが米軍放出品として闇市で出回っていた。規制緩和された1960年代からジーンズの輸入が始まり、日本ではウォッシュ加工のジーンズが世界で発売されるようになった。このころから岡山県の児島地域では、国産ジーンズの生産が始まり、デパートで売られるくらい人々に身近なアイテムとなった。日本にジーンズが入ってきてから50年近くの年月が経つ中で、70年代には裾の広いベルボトムジーンズ、80年代にはカラーパンツやスリムパンツ、ケミカルウォッシュジーンズが流行。90年代はビンテージ加工が流行するなど、時代の変化とともにジーンズの流行りは変化していて、常に大衆の人気を集めていた。しかし2000年以降のジーンズの人気はこれまでのものとは異なり、徐々に生産推移が下がっていることが(図1)を見るとわかる。原因として、ユニクロや、しまむらのような、格安ジーンズを生産販売するSPAの参入や、チノパンツやカーゴパンツのようなボトムスの選択肢の多様化が挙げられ、ジーンズが絶対的な存在ではなくなったのではないかと考える。

国内での生産推移が右肩下がりであることは対称的に、右肩上がりで伸びているジーンズがある。国産ジーンズ発祥の土地、児島発祥の児島ジーンズである。児島ジーンズは、地域全体でジーンズを盛り上げようとしている風潮があり、ジーンズ業界で見ると活気がある。¹

児島ジーンズ

岡山県の児島地域は、1960年代に日本ではじめて国産ジーンズを販売した地域として有名である。ジーンズが与えた児島地域への影響は大きく、2015年6月に駅名を児島駅からジーンズステーション児島に変更。駅構内やホームはジーンズでラッピング加工されており、駅を出るといたるところにジーンズが干されている。



(駅構内の画像) 著者撮影

児島駅から南へ15分程度歩いた先には、シャッター商店街と化していた味野商店街があるが、2009年に空き店舗にジーンズ販売店などを誘致し、児島ジーンズストリートを作った。児島ジーンズストリートは、400メートルのストリートにはじめの段階では現在30店舗以上のショップが並んでいる。訪れる観光客は年間15万人で、そのうちの割は外国の方であり、海外観光客が多い。



(ジーンズストリート内の画像) 著者撮影

¹ Gigazine 『ジーンズの発祥から日本での歴史が一目でわかる「日本のジーンズの歴史」』
<https://gigazine.net/news/20131102-history-of-jeans/>

価格は2万からであり、比較的高価ではあるが国産ジーンズとして品質は世界的に高い評価をうけている。以上のように、児島地

域はジーンズを用いて積極的な地域活性化活動を行っており、実際に地域活性化に繋がっている。何故ここまで児島のジーンズが世界的に見て有名になったのか、その要因を調査し、他の地域ブランドにその成功要因をあてはめられるのではないかと考え本研究に取り組んだ。

地域活性化の定義

橋詰登の『平成9年度中山間地域での総合的な活性化手法について』によると、各市町村の「人口動態」と「人口構成」に着目し、地域社会の活性化状況（地域活性化度）を捉え、人口減少に一定の歯止めがかかっており、近い将来においても定住人口の維持が可能である市町村を『活性化している』と捉える。逆に、過疎化の進行により人口が減少し続けると同時に、高齢者比率のみが高まっている市町村を『活性化していない』と捉える。²と記されている。今回は、上記の文章に書いてあることを地域活性化の定義として研究を進めていく所存である。

3.目的

児島ジーンズは、なぜ地域活性化に成功したのかを調査して、実際に地域ブランドを立ち上げた際に、地域活性化を実現するためにはどのような要因が必要となってくるのか、成功の鍵を探すことを本研究の目的と定める。

4. 仮説

地域のブランドを立ち上げて、地域活性化を実現するための成功の鍵は、その歴史的な産業基盤にあるのではないかと仮説を立てる。本研究の仮説を立証するべく、今回児島ジーンズの歴史的な生い立ち、児島ジーンズが誕生するまでのプロセスを中心に調査を進め、成功の要因が産業基盤であるのか明らかにする。

5.研究方法

² 橋詰登「第1章 中山間地域における活性化状況とその規定要因」『平成9年度中山間地域での総合的な活性化手法について』本編、農政調査委員会、1998年3月

①文献調査

インターネットを用いた調査と児島商工会議所の末佐さんから頂いた資料を用いた分析。

②インタビュー調査

児島商工会議所の末佐さんにインタビューを行い、上記二つの調査で不足している部分を補填する。

6.成果（明らかになったこと）

参考文献である、眞鍋寿男「日本で初めて国際ジーンズをデビューさせた町」や、「児島の歴史」等によると、児島はかつて瀬戸内海に浮かぶ島であった。『古事記』の国生み神話によれば、大八島である淡路島、四国、隠岐、九州、老岐島、対馬、佐渡島、本州に続く9番目の島として、吉備の児島は生まれた、と記されていて「吉備の児島を生み給う」と言われた。

岡山平野に流れ込む三大1級河川（吉井川、旭川、高梁川）の土砂により（図2）、一つの島であった児島は陸続きになった。



作成：株式会社フジタ地質（国土地理院発行 数値地図及びカシミール3D使用）
「吉備の穴海」の撮影場所は、高松上空5623mの位置から半径240kmの範囲。
垂直方向は強調して再現している。

図2 吉備の児島（出典：「児島の歴史」より）

これがこの時代の児島半島である。このころは吉備の穴海とされて浅瀬が広がっていたが、長い年月をかけ自然に運ばれる土砂と干拓による新田開発（723年に制定された「三世一身の法」により、新たに開墾した土地は3代にわたりその私有を認める）は、江戸時代まで約1000年続いた。その後、戦国時代が豊臣秀吉の天下統一により終わりを告げようとするころに、児島の北西部は一部で本土と連なった。

干拓の歴史は、このように児島の北側に広大な平野を生み出した。

土壌は塩分が含まれているために米の栽培には向かず、代わりに塩分に強いとされる綿花の栽培に成功した。日照りが多く、綿花の栽培には向いている土地であったこともあり、綿花栽培が児島地域で主となる産業であったことは現在でも変わらず、平成20年度の県内製造業における繊維産業は図3のグラフを見ると1位であることがわかる。

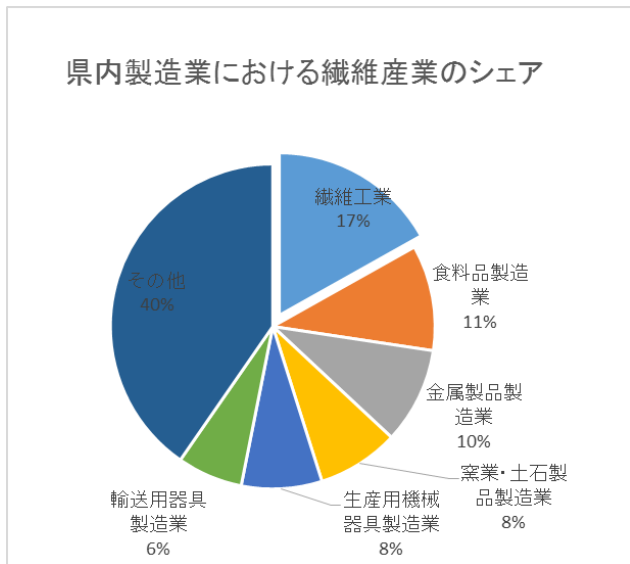


図3 県内製造業における繊維産業のシェア (出典:「平成20年工業統計表岡山県の繊維産業」より)

干拓が進んでいくと同時に、元々児島の北側にあった内海航路は、南側に変わっていった。下津井港は、風待ち、潮待ちが良港であったため、参勤交代の大名や、江戸参府途上のオランダ商館長、朝鮮通信史など外部から多くの人間が立ち寄った。北前船の来航により、池田家の南の拠点としての地位を高めると同時に、諸物資の交易による海運業が発達した。北前船の運ぶニシン粕は、塩に強い綿花を栽培するための肥料に使われた。この綿花の栽培が定着することにより、繊維産業が児島では主流の産業となる。海産物である魚、塩とその海上運送を中心とした産業に加えて主流の産業となった綿織物が存在するため、男は塩田で働き、女は織物生産に従事するという生活のパターンが定着した。漁業、塩業、機業のいわゆる『児島三白』という言葉で代表される児島の産業にかけた庶民の生活がうかがわれる。

また、四国金比羅山参りと両参りとされた、児島熊野大権現と眉山最大の霊場瑜伽大権現へと参る多くの旅人が訪れ、参道では児島

特産の美しい色合いの真田紐や、小倉帯などの木綿製品が土産として買われていた。1789年に児島で生産された真田紐は、茶器の桐箱に使用するなど、様々な用途で人気であり、児島の織物の起点となったという一説もある。

その後、西洋文化の流入により風俗が変化し、お土産として人気のあった真田紐、小倉織は売りに上げに大打撃を受けたが、1906年に児島に初めて動力ミシンが導入され、足袋の製造を開始した。1916~1919年に生産量1000万足を超え、日本一となった。1920年ごろ織物の大陸向け輸出が停滞したこと、生活様式の変化により、足袋の生産が衰退するに至り、業者は縫製の技術を活用して学生服の製造へとシフトした。1935年頃には、小学生服全国生産をほぼ独占、戦後1956年には全学生服生産が全国シェアの70%を占め、1962年に史上最高の1073万着を記録、翌年は1600万着で全国一になった。このころ、全国から集団就職の女子が児島地域の寄宿舎にあふれ、町は縫製業で働く若い女性たちで活気に満ちている。定時制高校に通いながら働く人も含め、多いときは3000人を超える若者が児島に訪れていた。学生服の生産量は、現在でも全国の60%強を占めている。

足袋製造業から、学生服を始めとした被服製造が主要産業となったことにより、繊維に関する多くの業種が児島に集積し、紡績業、撚糸業、染色業、織物業、ミシン業者からボタン製造業者まで栄えていた。

足袋製造から学生服製造で培った裁断、縫製技術を応用、また紡績業をはじめ多種多様な繊維関連業が集積された児島は、1964年の東京オリンピック開催を契機にジーンズの生産へシフトした。ジーンズが作られるようになったきっかけは、1940年、尾崎小太郎が尾崎商店の社名で学生服などの縫製工場を始めたが、後発であり、材料の調達が思うようにできないことから、1958年頃から丸尾被服としてジーンズの輸入、受託生産を開始した。この後、1965年に即時に輸入したデニム生地を用いて国産初のジーンズを縫製、そこからジーンズ産業へ展開していった。1967年には「BIG JOHN」ブランド第一号が発売された。

アメリカから輸入していたデニム生地は、ブリキのように厚く硬い生地で、足袋を縫製していた多くの経験や技術が役に立った。

その後、1973年には倉敷紡績が国産初のデニム生地を開発し、

国産ジーンズを本格的に流通させていった。

長い年月をかけて様々な商品を生産、縫製しながら培ってきた技術のほか、現在でも 20 軒近くの工業ミシン業者や縫製系を扱う多くの業者の存在であり、産地としての環境も児島の強みである。

機械や材料を販売するだけでなく、日々改良を繰り返している。その結果、生まれてくる独自のパーツなどは、ミシンメーカーをはるかに超えた児島にしかない機械であり、技術といっても過言ではない。このように、ジーンズの全工程に関する業者が、児島には集積している。

また、児島の加工技術は世界的に見てもトップレベルである。過去にはゴワゴワのアメリカ産ジーンズを日本人に普及させるために、履き心地を改善する必要があったが、着慣れた感じを出すための工夫を重ね、業務用のクリーニング用ドラムを用い洗ったり、軽石を入れて一緒に洗ったり、砂を吹きつけたり、脱色、ペンキ、擦り、破れ、様々な加工方法を編み出したことがあった。このことから「デニムを作るなら児島」と言われるに至っている。³と記されている。

7. 結論

児島地域は綿花栽培が盛んにおこなわれる土地であったため、足袋の縫製をはじめ、時代の流れに沿って学生服、ジーンズの製造に至った。

足袋の製造では、1000 万足を超え日本一になり、学生服の製造では全国シェアの 70%を占める。

足袋、学生服どちらも全国的に見て技術力が高く、それらの製造を長年行ってきたことにより、繊維に関する多くの業種が児島に集積し、今あるジーンズの一貫生産がある。

丸尾被服は、学生服業界に新規が参入することが難しいという理由で、ジーンズの輸入、受託生産に移行し、ジーンズ産業が日本で始まった。

アメリカから輸入した生地は堅かったが、丈夫な足袋を製造して

いた経験により生産ができた。

ジーンズを生産していく過程で、履き心地をもとめた結果、加工業の分野でも世界的に高いレベルであると認められるようになった。

上記のことから産業基盤の存在が地域活性化を実現させるための成功のカギであることが、明らかになった。

8. 今後の課題

今回、本研究を行っていく中で、児島地域における児島ジーンズでの地域活性化の背景には、その歴史的な産業基盤があり、長い歴史の中で、一次産業、そこから派生する加工産業の発展による技術力の向上が要因になっていることが明らかになった。

しかしながら、今回の研究が、果たして他の地域ブランドに対しても有効であるのか、そこについてはまだ研究不足であることが否めない。そこを補っていくためにも、今後のライフワークとして見ていこうと考えている。

参考資料

眞鍋寿男「日本で初めて国際ジーンズをデビューさせた町」 p

6.8.9

・塩見謙（1989 年）『地域活性化と地域経営』（学陽書房）

・「倉敷観光 web」 <http://www.kurashiki-tabi.jp/kojima-h1/>
(2017/12/11 最終検索日)

「地域活性化の定義」

橋詰登（1998 年）「第一章 中山間地域における活性化状況とその規定要件」『平成 9 年度中山間地域での総合的な活性化手法』農政調査委員会

「児島の歴史」

<http://www.kojima-cci.or.jp/kojiki/rekisi/rekisi.html> (2018/01/26

最終検索日)

「岡山県の繊維産業」

³ 「児島の歴史」

URL:<http://www.kojima-cci.or.jp/kojiki/rekisi/rekisi.html>
(2018/01/26 最終検索日)

「岡山県の繊維産業」

URL:http://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/94418_309445_misc.pdf (2018/01/30 最終検索日)

http://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/94418_309445_misc.pdf (2018/01/30 最終検索日)

「ジーンズの発祥から日本での歴史が一目でわかる日本のジーンズの歴史」

<https://gigazine.net/news/20131102-history-of-jeans/> (2018/01/30 最終検索日)